

杉本 章吾著

岡崎京子論

「流行は20年でひと回りする」と言われている。行動や嗜好（しこう）の個人化・細分化が進み、流行といつもの自体のありかたが昔とは違つとはいえ、この20年周期説にはそれなりの説得力があるように思われる。若い世代が成長するにつれ、自分が生まれたころの文化を発見し、感応する。残された作品は時を経ることで新たな意味を獲得し、歴史が紡がれてゆくのだ。

さて、2012年現在から20年前を振り返ったとき、あのころの「時代の顔」としてまっさきに思い出されるのが、岡崎京子というマンガ家だ。日本がバブル景気に沸いた1980年代後半に頭角を現し、96年、交通事故により休筆を余儀なくされるまで、マンガ雑誌に限らない多種多様な媒体で数えきれないほどの作品を発表した彼女。今年、代表作のひとつ「ヘルター スケルター」が蜷川実花監

鋭い観察眼と豊かな表現

督、沢尻エリカ主演で映画化されたこともあり、再評価の機運が高まっているようだ。

本書では、79年生まれの研究者が、マンガ作品の内側と外側、すなわち誌面に刻まれた絵と言葉と、当時の読者や時代状況との両方に目を配りながら、岡崎作品を論じている。また、独自の立ち位置で仕事をしてきた岡崎を取りあげるにあたって、これまで少女マンガはいかに論じられてきたのかを整理し、さらに少女マンガとは何か、何が少女マンガとされてきたのかを探られる。

高度資本主義の都市に生きる少女たちが、いかに夢や憧れや欲望を培い、折り合いをつけようとするかを描き続けた岡崎。その作品はときにアンニュイでありながら、ポップカルチャーの楽しさを肯定する浮ついた気分をたたえていたが、休筆直前になると、誰もグローバル資本主義の暴力的な側面から自由ではいられないことを示唆する陰鬱（いんうつ）な色が濃くなっていった。その鋭い観察眼と、マンガだからできる表現の豊かさを、いまあらためて吟味したい。

（野中モモ・ライター）

新曜社
3570円

岡崎京子論

杉本章吾

OKAZAKI
KYOKO